
東方永夜抄 ～ Side C

冥界寺吹雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方永夜抄 ～ Side C

【Nコード】

N3705F

【作者名】

冥界寺吹雪

【あらすじ】

東方永夜抄、咲夜レミリアペアのお話。本格的な弾幕バトルを描いたのですが、やっぱりそういうのは難しいです

序幕（前書き）

Aでもなく、Bでもなく。

序幕

長く、先の見えない程の廊下。どれほど歩いたろうか、しかし、夜はまだ明けようとしなない。

勿論それは必然だ。彼女が夜を止めてしまっているのだから、明ける筈がない。

飛び交う弾幕をかい潜り、やっとの思いでたどり着いたのは。

「巨大な月、ですね」

「ええ、そうね」

深淵の闇に浮かぶ月は、地上で見るそれとは比べものにならない程の大きさだった。明らかにここは地上でない。そんな錯覚さえ覚える程に。

「咲夜。はめられたわ」

幼い、しかし大人びた声の少女は呟く。明らかな苛立ちを含むそれに、咲夜と呼ばれたメイドの少女は小さく答える。

「どういうことです、お嬢様？」

お嬢様と呼ばれた少女は沈黙を続け、浮かぶ月を忌避するように眺めている。その表情は全てを悟っている、見透かしているといったものだった。

「はめられてそんな顔をするなんて変わっているのね、吸血鬼のお嬢様」

第三者の声が、どこからともなく二人に話しかける。

「密室の術、といったところかしら。お邪魔するわ、あなたの創った、もう一つの空へ」

「あら、そこまで理解しておきながらその表情なんて。わかっているはずよね。この術にはまった時点でこれを打ち破る方法はないって」

下からか、上からか。いつの間にか姿を現した声の主は月を背中に両腕を広げる。

その姿に、クスリと幼い少女は笑う。

「な、何がおかしいの？」

「あるわよ」

ほんの一瞬、静寂が場を支配した。

「そんなハツタリが私に通用すると思っているの？」

月明かりが徐々に弱み始めてきている。ちょうど月食が起きているときのような感覚だ。光が薄れるにつれ、闇そのものだった空が渦を巻くように歪み始めていく。

「何なの、これは。私の術は完璧なはずなのに」

幼い少女はうつすらと笑みを浮かべ、唇を開く。

「そうね、術は完璧。咲夜はこの完璧な術のせいでここに閉じ込められる運命だったのよ、悲しいことに」

自らの名を挙げられ、咲夜はやっと理解した。理解したと同時に、目を見開いた。

「自らの運命は操れないはずでは・・・お嬢様！それでは私が！？」

そつ、と短く言葉はきられた。全てを理解するのに時間をかけすぎた咲夜は、その事実を突き付けられて啞然とする。

「運命？・・・運命を操る能力の持ち主がいると聞いたことがある

けど、まさかそれが・・・」

月を背にする少女が放つ妖しく輝く弾幕は咲夜を取り囲むように展開するが、それらは一瞬で燃え上がり焼失した。

「咲夜、いきなさい。ここは私が食い止めるわ」

空間の歪みと歪みの間に元の廊下が見える。おそらくあれが真の目的地への入口だろう。

はじめこそ躊躇した咲夜は、今は迷いのかけらもなく走り抜ける。

「このっ・・・生命遊戯 ライフゲーム！」

「スターオブダビデ」

再び咲夜に向けられ放たれた弾幕を、圧倒的な火力で幼い少女が相殺する。

「あなたの相手は私。さあ、こんなにも月が紅いから本気で戦いましょう？」

「・・・」

歪んだ空間はいつしか元の闇に戻っていた。その空間に残されるのは二人の少女と、鮮やかな弾幕のみ。

「・・・ふふふ、いいでしょう。この術中では、あなたに勝ち目はない」

「それは面白そうね。楽しみだわ」

夜は、まだ長い。

前編

先ほどまでの無駄に長く広い廊下とは打って変わって、襖が連なる複雑な廊下では通りかかる兎達も弾幕を仕掛けようとはしない。あの長い廊下で攻撃が出来たのも、やはりあの空間が創られた偽りのものだったからなのだろう。

咲夜は一人足を進める。春雪異変のときもそうだった。お嬢様の力を借りずとも一人で異変を解決し、その力が人間外れだということ は明らか。

それなのにあのお嬢様は着いていくと言ったのだ。それが幸いしたからよかったものの、彼女はどこまで運命を操ることが、見透かすことが出来るのだろうか。

咲夜がそんなことを考えているうちに、いつしか廊下は終わりを迎えていた。他とは明らかに違う巨大な襖は、侵入者を拒むかのように異様な雰囲気醸しながら構えている。この先に何かがある、それは明らか事実だろう。静かに襖に手をかけ、開けた。

「きたわね」

深淵の闇に浮かぶ満月。お嬢様と別れたあの部屋に酷似したその空間に、黒い長髪の少女は背を向けて立っていた。

「あれは・・・本物の月」

この空間と先の空間の唯一の違い、それは月の大きさだった。空に浮かぶ月は、普段見慣れた大きさに淡い光を放っている。

「ようこそ永遠亭へ、吸血鬼の手下さん」

少女はくるりと振り返ると、整った顔立ちで笑みを振り撒いた。

「・・・まさか」

その瞬間、咲夜は思わず声をあげた。続いて言いようのない微笑を浮かべる。

「今更どうしたのかしら?・・・そう、満月を隠したのは私達。永琳の術は突破されてしまったけど、それももう済んだ話、終わったことよ」

咲夜の微笑はやがて声になる笑いに変わった。まるで話など聞いていないといった態度に少女は苛立ちを覚える。

文句の一つでも言ってやろうと口を開きかけたその時。

「ふふふふつ……。これは失礼しました。月の都の姫君、蓬萊山輝夜様」

「!?!?・・・何故、私の名を」

咲夜の鋭い眼光を真つ向から受ける輝夜は顔をしかめて呟く。

屋外とは思えない異様な空気が場を支配していた。輝夜に対峙する咲夜は言葉こそ冷静だが、とある思惑を抱いている。咲夜はいまだに微笑を絶やさない。

「お初にお目にかかりますわ。私は十六夜咲夜、今後は非ともお見知りおきを」

輝夜は手の平を口に当てる。まあ、と呟いたのは聞こえたがその表情まで読み取ることはできない。

「・・・十六夜家。月の都の中級貴族、だったかしら。とうの昔の話だから忘れたわ」

「そこまで覚えて下さっているのなら光栄です。まさか、こんなところであなを・・・」

不気味な笑みと共に

「月まで連れ戻すことができるなんて」

それこそその場の時間が止まったかのようにだった。

やがて、輝夜は喉を鳴らして笑い始める。

「くすくす……。そう、月の民がわざわざあんなお屋敷に潜入してまで私を捕えようと。……今日は面白い夜になりそうね」

「ええ、全くですね」

しばしの睨み合い。互いに一步も動こうとはせず、いたずらに時間だけが過ぎていく。にも関わらず、傾くはずの月はいつまでも同じ場所に留まっている。

「難題」

「メイド必殺」

同時にスペルカードを月へ掲げる。力を、真の満月の狂気に満ちたその光をカードに受けて。

「ブリリアンドラゴンバレッタ！」

「殺人ドール！」

過去に類をみない程の弾幕。お互いの弾が交差し、光のない地上は二つ目の太陽でも現れたかのようにまばゆい光に照らされた。

それを二人は殆ど動かずに避け続けている。避けているというよりか、予め弾幕のこないところを予知しているのか、はたまた弾幕の方から二人を避けているような錯覚に陥る程、その光景は異様だった。

「・・・その力、あなたも」

輝夜は何気なく呟く。

「それは私のセリフです。時を操る力、あなたも持っているだなんて正直驚きです」

「私の場合は少し特殊ね。私の力は永遠と須臾しゅゑんを操る能力。純粹に時を止める力というわけではないわ」

永遠と須臾、つまりは長時間と一瞬を操る能力。

「なるほど、空間の伸縮によって時間差を生む私とは似て全く異なる力ということですか。先ほどの弾幕でお互いの能力が干渉し合わなかったのも、能力の本質が異なるから、と」

「でしょうね。で、あなたと同じ時を操る力を持つ私をどうやって捕えるつもり？」

「簡単よ」

限りなく瀟洒に、咲夜は言う。

「弾幕で圧倒するのみだわ！」

その言葉に輝夜は妖しい笑みで返す。

「面白い、面白いわあなた！こんなに興奮した夜は始めてよ！」

ナイフ、レーザーが右から左から乱れ交う。それを優雅に避けながら、次なる攻撃を仕掛けようとスペルカードを取り出す咲夜。とはいえ不用意に弾幕を放ったところで時を操られ、命中はしないだろう。あらゆる弾幕であろうと時さえ操ってしまえば見切ることがたやすいのは咲夜が一番よくわかっていた。

だから咲夜は時を止め、一気に詰め寄った。

「いくらなんでも、この距離なら避けられないでしょう！」

時止めを解除した途端、月光を受けて鈍く光る一閃が輝夜を捉らえた。

いや、捉らえたように見えた。

咲夜が握り閉め振り払ったナイフはあっさりと空を切る。

「甘いわね」

背後から投げられた言葉に慌てて咲夜は振り向く。

「私がその程度の行動を読めなかったと思って?・・・墜ちなさい」

振り返ったその瞬間にはすでに目の前まで何重もの弾幕が迫っていた。時を止めようにももう間に合わない。輝夜は命中を確信した。

その確信は舞い散るトランプカードと共に砕け散った。

捉らえたはずの姿は着弾する間際にぼやけ、そして消えたのだ。

「危ないところでしたわ。予め時間停止を予定していなかったら間違いない直撃していましたね」

「時間停止を、予定ですって?」

簡単なことですよ、と咲夜は続ける。

「圧縮した空間に更に圧縮した空間を閉じ込めておく。そうすれば膨張を時間差で起こすことが出来るから、時間停止を遅らせること

が出来る・・・」

それが咲夜の能力の長所なのだ。時間そのものに干渉するのではなく、空間の圧縮膨張によって時を操ることで、能力を発揮するタイミングを予め自由に調節することができる。永遠と須臾を入れ替える、もしくは須臾を連続的に並べることによって時を操る輝夜には決して不可能な芸当である。

「確かにそれは凄い力ね。しかしそれはそもその能力の欠点、時間を操る力の発動に時間がかかるのを補っているだけじゃないかしら？」

その点輝夜の能力は一瞬で発動することができる。一瞬を連続的に重ねることで永遠を作り出す彼女の能力に欠点などない。補う必要などないのだ。

月光が降り注ぐ静寂の大地に、二人はただ立ち向かい合っていた。互いの能力を理解した上で、戦闘に何の意味を見出だすことができるのか。冷静に考えれば答えは一つ。

「これ以上の戦闘は無意味のようね。あなたもわかってるならどう？そろそろご退場願いたいところなんだけど。安心して、あなたのお嬢様の目的、本物の満月ならもう返すから」

「残念ながら、私達はお互いに最悪の相性のようですね。・・・でも、手土産もなしにメイドは帰りませんからご心配なく」

一陣の冷たい風が髪を、エプロンを靡かせる。

「それにですね」

輝夜の周囲をいつの間にか無数のナイフが取り囲んでいた。

「無理かどうかは本気を出してみないことには分かりませんよ?」

ナイフが着弾したとは思えない爆煙、轟音が全てを包み込んだ。

「そう、分かったわ。あなたには、私も全力でお相手してあげましよう」

立ち込める粉塵に、シルエットが浮かび上がる。

「あなたに、この旧難題が解けるかしら!」

前編（後書き）

スペルカード講座 第一回

○難題

「ブリリアントドラゴンバレッタ」

輝夜のスペル。七色のレーザーと七色の弾幕が同時に襲うスペル。永夜抄の輝夜スペルでは、私は子安貝と肩を並べて苦手なスペルです。

○メイド必殺

「殺人ドール」

咲夜のスペル。大量のナイフをばらまき、時止めによって矛先をバラバラに向けてから時を戻す。一度避けたナイフが時止めで返ってくるのがいやらしい。

中編

巨大な月の下、二人の少女を包み込むように弾幕は展開され、そして消えていった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「ふう・・・つつ」

荒い呼吸を必死に静めようと胸を撫で下ろす幼い少女。

「・・・偽りの月下では力も思ったように振れないわけね。あなたなんかと互角とはね」

「この密室の術をもつてして私と互角だなんて、あなた何者？」

ゆったりとした風が流れる。次なるスペルカードを選別している最中、幼い少女は不意に口を開く。

「・・・空気が、変わった」

深い口調。何かを考え込むようにその視線は宙に浮いている。

「この感じ・・・。まさか、運命にさえ抗おうというの？」

「何を訳の分からないことを・・・。あなたの運命も、あんまりあてにならないんじゃない？」

刹那、空間は一瞬弾けるような白い光に包まれたかと思うと、気付けば襖が連なり畳の敷き詰められた部屋へと変貌していた。

「な、術が解けた・・・？」

あまりに一瞬の出来事に何が起きたかすら把握出来ていない様子。あれほど完璧だった空間が何の前触れもなく、跡形残らず消え去ってしまったのだ。

「ありえない。・・・これが、彼女の力だというの？」

後ろによろけ、そして今一度辺りを見回してみる。変わらない、いつもの屋敷の姿。幼い少女はというと、とても事の根源とは思えない表情でまた辺りを見回していた。

「・・・っ」

気がつくや幼い少女の姿が消えた。しまった、現実に取り残されて彼女を逃がすとは・・・。

とはいえ、行き着く先は決まっている。まあ、そう焦ることもないのだ。

いつしかその部屋から人影は消えていた。

「旧難題、月夜を隠す妙玉」

その一言で空に浮かぶ月は薄れ、そして消えた。

「月を！？これでは、あなたでさえ・・・」

「ええそうね、お互い月の力を利用している手前、月さえ隠してしまえば時を操ることはできない」

にっと、咲夜は笑みを作ってみせる。

「・・・成る程、時止めでらちがあかないのならその力を封じてしまえばいいと・・・。余程弾幕に自信がおりなんですネ、姫様」

「ふふふ。あなた、かぐや姫のお話は知ってるわよね。姫に求婚を求めた人間を五つの難題でことごとく追いつ返したという物語」

「ええ、あのお伽話でしょう?」

「でもね、その五つの難題は偽られたもののなのよ。本当の難題があまりに残酷で、非道で、狂氣的なものだったから」

隠されてしまった月に名残を惜しむよう天を仰ぐ輝夜。

「それが、旧難題よ」

空に浮かぶはもう一つの二人の姿。大地に映される深淵の空。まるで天上が、大地がまるごと鏡になったかのようにその姿ははっきりと映し出されていた。

「スペルカードなんてお遊びはもう終わり。その目にしっかりと焼き付けることね。・・・旧難題 遙か星見ゆ鏡形!」

空の星が、流星のように弾幕となって地上に降り注いだ。大地を次々と弾幕が襲い、地上に到達した弾幕は再び夜空の鏡に映し出される。映し出された弾幕は再び大地を、咲夜を襲い、地上に到達した弾幕は再び・・・

「弾幕が、消えない!？」

時止めがない以上根性で避ける以外に道はない。その咲夜にとって、尽きることはない弾幕は致命的だった。

そして何より問題なのは不用意に弾幕が放てないことだ。輝夜が放った弾幕が消えないのなら、自分で放った弾幕も当然この無限空間に閉じ込められるだろう。ただでさえ尋常じゃない弾幕に拍車をかけるようなマネはできない。

「く・・・」

つい唸りをあげてしまう。

「さあ、いつまでもつかしらねえ。この終わりのない無限地獄で」

咲夜は考える。この状況を打開できないものかと。鏡と化したこの天上をどうにかすべきなのは明白だが、その方法がわかるのなら苦労はしない。ならばどうする、勝機が訪れるまで避け続けるか？そもそもそれで勝機が訪れるのか？

「・・・!」

状況を頭の中で必死に整理し、そして一つの矛盾点を導いた。避け続け、冷や汗を流すような厳しい表情から一変、口元がつりあがる。

「手も足もでないといったところかしら？無理もないわね。そろそ

る降参した方が・・・」

刹那、全ての弾幕が咲夜の視界から消えた。

「なに、を・・・」

ナイフを片手に全速力で詰め寄られ、それを間一髪で身を翻しかわす輝夜。先ほど輝夜の立っていた場所には咲夜が勝ち誇ったかの表情で腕を組み仁王立ちをしている。

「・・・やっぱり」

自らの真上の空を見上げる咲夜。空に映し出されるはずの弾幕も、自分の姿も、そこだけ丸く切り取ったかのようにただ暗闇の夜空が広がるだけだった。

「おかしいと思ったわ。私が避けている間、あなたは避ける仕草一つ見せないんだもの」

核心をついてやったはずなのだが、何故か笑みを絶やさないう輝夜は小さく手を叩く。

「・・・すごいわねえ、この難題をいとも簡単に見破るなんて。だけど残念、もう簡単な難題は残ってないわ」

「あら、難題が簡単だったら矛盾してしまいますよ。もうお戯れに付き合うのも疲れたところですし」

同時、二人は右腕を夜空に掲げた。

「月刃 切り裂きジャック」

「旧難題 猛る地を裂く宝剣」

途端、獲物を狙う鷹の如く凄まじい速度でお互いの刃が交差した。瞬間猛烈な閃光が互いの刃の接点から放出され、その光景は正しく幻想的といえる。

右へ、左へ、何度も互いに刃を振りかざしては受け止め、その度に閃光が溢れる。咲夜は限りなく瀟洒に、輝夜は限りなく優雅に振るうその刃の舞は、まるで見世物のような美しさすら覚える。

互いの腕は完全に互角。だからこそ楽しいのかもしれない。二人の表情は戦いの最中とは到底思えない程あまりにも余裕だった。

「すごい、すごいわあなた！こんなにおもいつきり剣を振るえたのは初めてよ！」

「ええ、私事です。これほどの腕をお持ちだったとは！」

咲夜は地を蹴り、宙へ舞う。それを見て迎えうつかのように輝夜も空へ翔ける。今まで以上に大きく刃を振りかざす咲夜。先ほどとは比べものにならない程刃は白く、まばゆい光を放っている。明らか

に金属の光沢ではない。

同じく輝夜も手中の刃を背の裏まで引き付ける。咲夜のそれに勝るとも劣らず放たれるその光は輝夜の着物の模様まで鮮明に見えるほどに宵闇を照らし出す。

互いの距離わずか数メートル。刃の光は空に刃の軌道を刻み、そして

金属と金属が衝突する音。鉄柱を金属バットでフルスイングしたような、そんな凄まじい轟音が身体を震わせた。

同時、空を円盤のように回転する二つの刃は白光を保ちながら地面に突き刺さった。

「・・・なんて衝撃」

右腕を左腕でかばうように支えながら輝夜は呟く。

接近戦も駄目、弾幕戦も駄目。二人の実力は釣り合った天秤のように互角だった。体力は疲弊し始め、肉体的にも完全とは行かない様子。ここまでくると、どちらが先に体力を使いきるかが戦いの明暗を握っているかに思えた。

しかし、輝夜はあくまで楽しんでいた。

「・・・いいわ、あなたが相手なら残りの難題も開放するとしまし

よう。いくわよ！」

突如足への負荷が重くなった。それと同時に、視界のもの全てが急降下し始めた。

いや、輝夜と咲夜が急上昇しているのだ。

風圧がすごい。上から吹きつけてくるそれを、髪を押さえながら踏み止まる咲夜。木々を見下ろし、山を見下ろし、雲すらも見下ろし。

終いにたどり着いたところからは、地球すら見下ろすことができた。

「こんな術・・・ありえない」

咲夜は呟いた。そう、月が隠されているにもかかわらず、こんな膨大な力を使う術が使えるはずがない。足元に展開された巨大な魔法陣を踏み締め、あらためてその事実を受け入れる。

「有り得るわ。実際こうして術は成立してるんだから。地上とも月とも交信を絶つ、月飛地翔の法」

その単語に咲夜が目を見開き口元を手で覆う。その術は咲夜にも聞き覚えがあったのだ。月でももはや伝説とされた秘術中の秘術、全ての星との干渉を完全に絶ち、術を解かない限り対象を永遠と魔法陣上に捕らえると言われている。

「ここなら逃げ場もないでしょう？」

「・・・ええ、これはかえって都合のいい術ですね」

目一杯、咲夜の顔が綻ぶ。

「貴方を逃がすことなく、捕らえることが出来るのですから」

「・・・やっぱり面白い人。ここで殺すのが勿体ないくらい」

くすくす、と輝夜は込み上げる笑いを必死に抑える。

もはや取り返しはつかない。ここでどちらかが堕ちる以外に、道はないのだ。

「難題の前に苦悩しなさい、月の使者！」

「裁きの刃に刻まれるがいいわ、亡命姫！」

そして、運命が回りだす。

中編（後書き）

スペルカード講座 第二回

○旧難題

「月夜を隠す妙玉」

輝夜のスペルで、オリジナルスペル。月を特殊な弾幕で覆うことにより月の力を無効化する。月の力に頼る時止めはこの力によって封じられた。

○旧難題

「遙か星見ゆ鏡形」

輝夜のスペルで、オリジナルスペル。地上と夜空を弾幕を弾き返す鏡状の空間で覆い、弾幕を永遠に地上に閉じ込める。弱点はこのスペルを使った者の周囲が通常の空間で、弾幕がないこと。それに気付けなければほぼ無敵のスペル。

○月刃

「切り裂きジャック」

咲夜のスペルで、オリジナルスペル。巨大なナイフを剣のように扱う。その一撃は銀より硬度の高いものでさえ簡単に切り裂いてしまう。

○旧難題

「猛る地を裂く宝剣」

輝夜のスペルで、オリジナルスペル。月都の技術で鍛えられた最高峰の剣。その一振りは大地をうがち、海を割る。

後編

地上のお屋敷、広大な庭が見渡すことのできる大広間で、その少女は天上を見上げていた。遙か空高くに浮かぶそれは、大変発光しているため地上からでもよく見える。

彼女は特にこれといった表情をする訳でもなく、ただ月でも眺めるかのようにそれを見つめていた。

「!・・・あれは、月飛地翔の法!？」

不意に少女の背後から声がした。

「あら、鈍そうに見えてなかなか早かったのね」

その声の主はそれ以上喋ろうとはせず、ただ黙々と空に浮かぶそれを見続けていた。実に悲しい顔をして。

「・・・」

しかして幼い少女は微動だにせず、ただ冷ややかな視線をそれに投げるのみであった。

魔法陣は野球ドーム一個がまるまる収まるような規模、弾幕を避けるにも接近戦をするにも十分な広さである。その上に二人は静かに立ち尽くし、そして無言のまま弾幕が激しい衝突を始めた。花火のようだなって生温い表現では言い表せない、いうなればこれは戦争だ。一国と一国が国の生存をかけて戦う戦争を彷彿とさせられる程に、美しさを通り越したその狂気じみた弾幕は凄まじかった。

「舞刃 スピリチュアルスパイラル！」

咲夜の放ったナイフの全てが螺旋上に連なっていく。超高速で回転するそれはさながら全てを飲み込む竜巻といったところだろうか。

咲夜が指を鳴らすと、ナイフの竜巻は輝夜目掛けて移動を開始する。こんなものに巻き込まれたら服はおろか、身体ごと切り刻まれるのは容易に想像できる。

だがしかし、輝夜は動こうとはしなかった。

「旧難題 出づる日を討つ神矛」

輝夜の頭上に、巨大な槍が現れた。いや、槍の形をした巨大な弾幕、
というべきか。

その矛先を向けられたのは竜巻、そしてその後ろに控えていた咲夜。
その圧倒的な威圧感に、咲夜は無意識のうちに身震いする。

そして槍は放たれた。刹那竜巻に衝突し、炎のような火花が接触面
から吹き上がる。互いに勢力を弱めることなく、ひたすら災害と神
矛は身を削りながら停滞。さながら天空に猛る竜を討つ大槍、とい
ったところか。それほどに二つの弾幕は、もはや弾幕と呼ぶのも可
笑しい、二つの災厄は現実を大きく逸脱していたのだ。

「これを止めるとは驚きですね。後どれくらいもつでしょうか？」

「私の台詞を取るのは困るわ。神矛の前に沈みなさい」

竜巻、神矛共に勢力は一段と強くなり、飛び散る火花も本格的に弾
幕と化してきた。それらは莫大な熱を生み、その熱気は後方で構え
弾幕を放ち続ける咲夜と輝夜にもつたわる程だ。

「・・・埒があかないですね。ならば、これでどうかしら！」

咲夜が新たに放った弾幕は、複数の小型ナイフ竜巻を形成した。これのどこが弾幕であろうか。魔法陣上は、嵐の海のように大荒れに荒れていた。

その状況を見てか、輝夜もさかさず弾幕をばらまく。その弾幕はいくつもの巨大な球を作るよう圧縮されていき・・・そして

「神刃 月返しの竜神乱舞！」

「旧難題 我が身を捧ぐ東方の金！」

圧縮により高熱を帯びたいくつもの巨大な弾は、その全てが竜巻と衝突を始めた。轟音が響き渡るその中央では、未だ巨大竜巻と神矛が押しつ押しされつ力を奮っている。

衝撃で弾け飛ぶいくつもの弾幕の破片を二人は優雅にかわしながら相手の様子を伺う。

竜巻と巨大弾の壁が二人の間を完全に分断し、もはや直接攻撃を加えることはできない。

自らの弾幕を後押しするよう、がむしゃらに弾幕を放ち続ける。その度に竜巻は、神矛は、巨大弾は火力を増し、全てを飲み込まんと暴走を続ける。

突然、物凄い地鳴りがした。

災厄同時の激しい衝突に、二人の足を支えていた魔法陣が歪み始めたのだ。

再び地鳴り。今度はいくつものひびが編み目上に広がった。

「・・・まずい！」

輝夜が思わず叫ぶ。魔法陣が崩壊しては足場が無くなるのは愚か、酸素の供給が完全にストップしてしまうのだ。それが何を意味するか、宇宙に投げ出され、酸素も吸えず、そして大気圏との摩擦によって・・・。

気がついた時にはもう遅かった。今までにない地鳴りと共に、ひびに沿って魔法陣は崩壊した。崩壊した瞬間場は無音空間となり、二人は地球の重力に為す術なく引き寄せられ・・・

咲夜が目を覚ますと、明るい月が瞳を照らした。本物の月、輝夜に隠されてしまった、本物の……

ふと我に返った。ここは？私は死んだはずでは？そんな困惑した表情に、一人の少女が声をかけた。

「お疲れ様、咲夜」

幼い少女が笑顔で咲夜の頬をつついてくる。

「あ、わ、お嬢様!？」

「なーに驚いてるのよ。このレミリア様の能力をもう忘れたのかしら？」

運命を操る程度の能力。まさか、最初から全てを悟って!？

咲夜が困惑している隣で、同じくキョトンと尻餅をついている少女がもう一人。

「姫様、お立ちになって下さいな。傷の手当てもしないといけませんし」

「……永琳？私、どうなって……」

輝夜の一言に答えたのは永琳ではなかった。

「咲夜の運命を操っただけなのにオマケがついてきたみたいねえ。うっん、運命操作は難しいわ」

わざとらしい笑顔でレミリアは言う。はっとして輝夜はレミリアを見つめるが、やがて失笑して俯く。

「お嬢様、私、ずっとお嬢様に隠していたことが・・・」

「全く咲夜の癖に私に隠し事だなんて。まあ、月の使者だなんて面白そうだから雇ったんだけどー」

「最初から知っていたんですか・・・」

咲夜もまた失笑してしまう。

「で、咲夜さん。私を捕まえるんでしょう？その吸血鬼に助けられてる手前、断りはしないわ」

「!・・・姫様!？」

視線を落とす輝夜に、咲夜は笑いながら答える。

「・・・もういいですわ、そんなこと。何より私が輝夜様を連れて月まで戻ってしまったら、お嬢様の身の回りの世話は誰がするんです?」

輝夜の視線が、咲夜と合う。

「・・・やっぱりあなた、面白いわね。あなたも月の使者に狙われることになるかもしれないのに」

「私が負けるとお思いで？」

「ふふふ、それもそうね」

ほんのりと空が白み始めてきた。月もすでに姿を薄めており、永い夜が終わりを告げようとしている。

「咲夜ー、眠いわ。そろそろ帰るわよ」

「はい、ではお屋敷に戻りましょうか」

メイドと吸血鬼、二つの影が空を飾る。そしていつしか空の彼方に忽然と消えた。

「永琳」

唐突に輝夜が呟く。

「なんでしょう、姫様」

「私たちも、あんな風になれるといいわね」

今日もまた、竹林にいつも通りの朝が訪れた。

後編（後書き）

スペルカード講座 第三回

○舞刃

「スピリチュアルスパイラル」

咲夜のスペルで、オリジナルスペル。大量のナイフを螺旋階段のように宙を舞わして竜巻を起こす荒業。触れたもの全てをズタズタに切り刻む程、その威力は驚異的。

○旧難題

「出づる日を討つ神矛」

輝夜のスペルで、オリジナルスペル。弾幕を槍の形に密集させ、一気に標的を貫く。小細工のない、純粋に力だけで相手をねじふせる奥義。

○神刃

「月返しの竜神乱舞」

咲夜のスペルで、オリジナルスペル。スピリチュアルスパイラルの規模が多少小さいものを無数に放つ。何体もの竜が狂い踊って天空に浮かぶ月を退けようとしているように見えるその光景からその名がつけられた。

○旧難題

「我が身を捧ぐ東方の金」

輝夜のスペルで、オリジナルスペル。弾幕を圧縮することにより形
成される高熱の巨大弾を大量に放つ。その弾幕の輝きたるや、まさ
しく東方に眠る金こがねそのもの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3705f/>

東方永夜抄 ~ Side C

2010年10月15日19時02分発行